七つの年の水の寿命（じゅみょう）

新潟県

むかし、ある男が、旅からの帰り道、にわか雨にあいました。そこで、鎮守（ちんじゅ）さまのお堂に入って雨宿りしました。

夜中になると、チャンコチャンコと馬の鈴の音がして、お堂の外から、声が聞こえました。

「鎮守さまよ。村でお産があるから、行きましょう」

すると、お堂の中で、

「せっかくだけど、うちには今夜お客があるので、行かれない。おまえさんがたで行ってください」と、鎮守さまが答えました。

「そうかい。それじゃあ、しかたがないな」

そう声がして、神さまたちの鈴の音は遠ざかっていきました。男は、おかみさんにそろそろ子どもが生まれるので、もしかしたらうちのことかもしれないと思いました。

しばらくすると、また鈴の音が近づいて来ました。

「お産は手間どりましたが、やっと男の子が生まれました」

「それはご苦労さまでした。生まれた子の寿命はどうなりました」

「七つの年の水の寿命に決まりました。五月五日の節句（せっく）の日に、河童（かっぱ）にとられます」

夜が明けると、男は急いで家に帰りました。家では、男の子が生まれていました。

やがて、男の子は、すくすく育って、七つの年の節句の日になりました。餅（もち）やだんごを作って祝っていると、見たことのない子どもがやって来て、

「川へ水浴（あ）びに行こう」と、男の子をさそいました。男とおかみさんは、その子に、

「おまえもこっちへ来て、いっしょに祝え」といって、餅やだんごや、たくさんのごちそうを食べさせました。

男の子は、その子と手をつないで、うれしそうに川へ出かけて行きました。川岸まで来ると、子どもは、

「あんなうまい餅やだんごを食ったのは初めてだ。今日はおまえをとるつもりだったが、やめることにする。おれの命の分だけ生きてくれ」といって、河童の姿（すがた）になると、川へどぶんと飛びこんでしまいました。

男の子は、元気で長生きしたということです。

村上郁再話

資料『加無波良夜譚』文野白駒